

# 建築家の回顧録

Architect's Memoirs

坂井 修一

Sakai Syuuichi

坂井建築士事務所(高岡市)、主宰  
Sakai Architecture Office Chairman

概要；

本稿は「感性が選択した、言葉や文章等」を綴ったものです

編集からの推薦文；

著者は2025年3月6日(木)、14時~17時、研究談話会で「自分の頭で考える、常に本質に立ち返って」と題してプレゼンされました。その時の資料を改定補充し、今回の資料とされました。内容は、いち技術者の仕事への取組みイコール人間成長として塾考された莫大な資産をまとめ上げられたものです。専門行為は人間的成長とリンクしたものであり、フィロソフィと技術の在り方が鋭く問うておられ、社会には技術偏重に警鐘を鳴らし、また後進への道しるべになるかと思えます。

感性 欲動 言葉  
Sence Drive Word

## ◆◆ 人生を振り返る ◆◆

- ・若い時は、生命力があって生きているそのことだけで、なにも考える必要がなかった。
- ・生きる力を生み出す：一人ひとり、まったく境遇が違う。似たような境遇というものはあるでしょうけど、一人ひとり生まれも育ち方も全部違う。だから人の生き方を参考にすることはできるけどそっくり真似することはできない。自分で生き方を生み出さなければならない。
- ・どう考えてもいい：世の中は、こうでなければならぬと云うものではないし、どういう風に考えていいんです。この世に絶対なんてことはありませんよ。何かあるとしたら、こっちの方がいいかも、というくらいのもんです。
- ・なんだかやってみたい：必要だから、やるわけではない。必要ではないから、やらないわけではない。なんだかやってみたい、という思いが大事。
- ・毎日が新しい：日々、違う。似たような毎日だと云えば、似たようなものだけど、違うと云えば違う。その都度違う。生きているってそういうこと。同じことを繰り返すことは、あり得ない。
- ・今日という日：今日は何をしなければ、ではなく、今日は何をやるか。朝起きた時の感触。その日の出来心で動いていた。今日はどういう風が吹くだろう。ふと、何かいいことを思いつくかもわからない。
- ・出来心：私は毎日、毎日、出来心。ふっとどういうところから思いが来るのかわからない。どうして降ってくるのかわからない。
- ・自分でつかまえる：自分でつかまえなければだめ。人

に教えられたって駄目。自分でちゃんと見て、なんとなく引き込まれて、だんだんとその世界に入っていく。そうすれば、真実というものに、少しは触れられかもしれない。

・昨日のあなたはいい：人は変わるんですよ。進歩するのか退化するのかはわからないけど。少しずつ変わっていることは事実。一切は変化する。昨日のあなたはもういい。

・たぶん明日もある：人はこういう風に生きたいと思っただけ、しかし現実の人生は違う。一寸先はわからない。今日があるから、明日もあると思っただけ。でも本当は、明日があるかどうか、誰にもわからない。これまでの経験上、明日もまあ、あるだろうというくらい。

・道草：何が大切かということを探しながら生きていると、それは目標を決める生き方でなくてとらわれない生き方だと思う。横にいいものがあつたら、ちょっと寄った方がいいですよ。道草は大切です。

・ないものねだり：ないものは欲しい。あるものはありがたくない。あるものを、ちゃんとありがたく思えて、ないものは、まあしょうがないと思ひ。ねだらない。そういう人は幸福。自分のおかれた境遇を、これでよかつたと満足できる人は、幸福。

・幸福はあなた次第：幸福はご自分の意識次第。

・心の空白：人には、云うに言われぬ空白が、心の中にある。表現しえないもの。自分でもこれはこういうことだと、はっきりわけがわかってやっているわけではないもの。なんであんなことをしたんだろうと思っただけ、わかれはしない。人は不思議な生き物だから、自分でもわからない、やりながら生きている。

・**手探り**：老いるということは、大自然の運びですから、どうすることもできない。確実に少しずつ、衰えている。自然に逆らわずに、上手に手なづけながら行くのが、最上の形でしょうね。手探りで、しっかりと、老いをつかみながら、生きていきたい。

・**未完成**：生きている限り、私は未完成。まだまだ磨けば、こういうことだって、ああいうことだって、できるかもしれないということがあるから。

・**続けている**：良い悪い、価値観ではなく、その年にならなければできないもの、その年にとって得られたもの、そういうことで、私は続けているんです。

・**たまたま**：全部運命なんですよ。こういう人間に生まれてきた、というのも運命だし、人との出会いも運命だし、運命ってというのは、誰がつかさどっているのか、誰も判らないし。天地の大自然の運行で、自然とそうなっているだけのことでしょ。

・**人の行く末**：人というものに生まれてきたから、人というものをやっているだけです。

## ◆◆ 私のものの見方・考え方・行い方 ◆◆

**感性**：なんとなく、引き寄せられるものがある。気になるものがある。引き寄せられるものがある。ということは、私の琴線に触れることであり、私の感性が試され、それを拾い上げ考慮することは、自分自身を発見することでもあるのだ。

・**直感**：思考過程を経ないでた、物事の本質であることが多い。

・**対象と向き合う**：「外部からの刺激」が「私の心身に触れる」と心身（欲求・感覚・言語化）が「直感」・「仮説」・「結論」が構想される。目的意識を持った情報収集が始まる。最初に描いた「雑な絵」がどんどん情報を積み重なっていくことで、時間と共に精度が上がっていく。

・**見方**：思い、思いの見方をしている。枠を創って見る見方もある。見ること、よく見ること。

・**自分の頭で考える**：必ず「言葉」にしてみる。表したい言葉を探すことは、「考えること」である。自分なりの「仮説」を立てる。一つの見方を基準にすると、ほかの考え方が明瞭に見えてくる。とにかく一度「結論」を出す。不完全でも自分なりの答えを出しておけば、あとで自分の考えを検討できる。「行動しながら」考える。「動あれば反動あり」一つの動きがあるときは、それに反する動きが必ず起こる。「答え」より「考え方」の重要性を知る。答えを早く知ろうとすると、「考える力」は身につかない。

・**情報を考える**：「自分の絵」にする。自画像をはっきり持てば、持つほど物事をしっかり考えられる。「目的意識」を明確にする。「情報収集」と「判断」の役割を分ける。

・**考えを深める**：ふと浮かんだ「疑問」を抑え込まず、突き詰めて考えていくと、真実が見えてくる。

問題を早く知ることが出来れば、知った後はじっくり対策をたてられる。個人の内面的な問題でも、せめぎ合う二つの要素を楽しむ境地を拓くことが大切で、それには、「粘り」と「潔さ」を併せ持つことが必要です。悩み、惑い、試行錯誤すること、考える力が養われる。

・**間違いを減らす**。まず「択一」より「共存」を意識する。直感で動いた方がたいていの場合正しくて早いと思われ間違いも多い。感性も論理のうちと考えるが、あえて感性を殺し論理を優先させることも時には必要と心得ておく。論理は「保険」と心得る。「自分に都合のいい論理」を調達しない。「効率」と「精神」のバランスをとる。

・**失敗は、次の一步に過ぎない。**

・**「わたし」と「やつ」**：空にして待つ。「やつ」は「わたし」のなかにいるものなのか。それとも、「わたし」のなかに入ってくるものなのか「わたし」にはわからない。

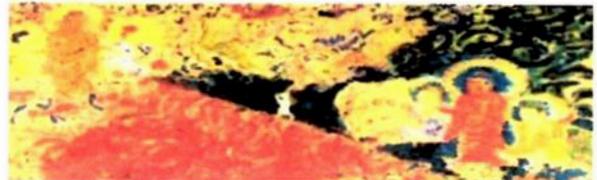
「やつ」は気まぐれ者のようだ、やって来る時もあれば、やってこない時もある。「やつ」がやってくると何かが動き出す。動いて何かをせさせ、せさせと作り出す。作り終わると居なくなる。「やつ」と会いたい時があるが「やつ」は来ない。「やつ」と会いたくない時があるが「やつ」が突然やってきてせさせと作り出す。せさせと作り出す。作り終わると消えてしまう。「やつ」がやってきたら「やつ」のペースに乗せられてしまう。

・**建築設計の行い方**：場所を訪ね、身を置き歩き回る。感じて、見て、視て、観て、察する。観察の「観」は、「見極めること」であり、「察」は、「推察、推し量ること」である。従って、観察は深く見極めて、その原因、結果を推察することである。当たり前のことへの再認識。「なぜ」を発する。目をとめよ。よく見よ、疑視せよ。「現状を知ること」。何が、どうなっているのかを認識すること。「考えること」、「表現すること」、「つくる（具象化）こと」、「語る（抽象化）こと」、このサイクルを繰り返しています。このサイクルを繰り返して回します。このサイクルを繰り返して回すことによって、人が人と環境と相互作用しながらあらたな価値を感じ取っていく能力を育てることが出来ると云われている。良い「なぜ」が発せられると、良い「答え」が得られるように思われます。

・**究める**：最初は「倣う」ことから始まるにしても、基礎的な技術が身についてきたら、今度はその基礎からジャンプして、自分独自の世界を希求するという方向にいかなくては嘘です。言い換えれば、「自分の目」で、発見して、「自分の頭」で考え、そして、「自分の心」で感じるという段階に進んでいく。基礎的な修練を積んだあとでは、ユニークな表現の領域を目指して、オリジナルの道を追求するのが王道だといえましょう。



・我々はどこから来たのか 作：ゴッガン



・御二河白道図 作：棟方志功

1948年	—19—	1967年～1975年	—25—	2000年	—25—	2025年～2033年	頃
・誕生、人をつくる		・職能人をつくる。		リターンニング		・職能人を作り上げる。	
・基盤、基礎、基本を身につけ		・収、守（型をつくる）の段階		・破（型を破る）の段階		・離（形をつくる）の段階	
生きる力を養い育て身につける。		技を身につける。		再構築（新たな知識と技の習得）		自分流	
<p>・人（感覚と欲求と言語化）をつくる。</p> <p>・生きる力（知識、技術、技能、学ぶ意欲、意志、表現力、判断力）を身につける。</p> <p>・心身（意欲・情熱・意志）をつくる。心と言葉と体は三位一体。言葉を探すことは、考えることである。</p> <p>・ものの見方、考え方、行い方の基礎・基本を身につける。</p> <p>素直に見る。本質を問う。自分の頭で考える。心構え、姿勢、態度を整える。実行。を繰り返す。</p>		<p>・職能人をつくる。</p> <p>・わたしのやっていたこと。</p> <p>場所を訪ね、身を置き、歩き回り。感じて、見て、視て、観て、察する。観察の「観」は「見極めること」であり、「察」は「推察、推し量ること」である。従って、観察は深く見極めて、その原因、結果を推察することである。当たり前のことへの再認識。「なぜ」を発する。目をとめよ、よく見よ、擬視せよ。「現状を知ること」。何が、どうなっているのかを認識すること。「考えること」、「表現すること」、「つくる（具象化）こと」、「語る（抽象化）こと」、このサイクルを繰り返して回すことによって、人が人と環境と相互作用しながら、新たな価値を感じ取っていく能力を育てることが出来ると云われている。良い「なぜ」が発せられると、良い「答え」が得られるように思われます。</p> <p>・「仕事」にいそしみ「仕事」に精進してゆくことによって、自然と自分を育ててもらえる。自分で「技」を磨きつつ、やがては、人間として、「道の世界」にまで引き入れてくれる。「形の方面」から自然と「心の方面」を高めてくれるものが自ずから、「仕事のうち」に備わっている。それが「仕事の徳」となって現れる。</p>					

◆◆ 職能人を創る ◆◆

- ・**本分**：人が本来尽くすべき務め。身に具わっている分際。「本分」という言葉は自分の役割や責任を理解することの重要性を教えてください。この言葉を意識することで、日常生活や仕事で何を優先すべきかを明確にする手助けになります。
- ・**仕事**：「仕事」にいそしみ「仕事」に精進してゆくことによって、自然と自分を育ててもらえる。自分で「技」を磨きつつ、やがては、人間として「道の世界」にまで引き入れてくれる。「形の方面」から、自然と「心の方面」を高めてくれるものが、自ずから「仕事」のうちに備わっている。それが大きな「仕事の徳」となって現れる。「仕事」だけのことを考えていればよい。結果としてはその「仕事」が「人間」をよくし、そのいい「人間」がまたいい「仕事」を産み、その「仕事」がさらにまた、「人間」をよくし、かくて「仕事」と「人」とが、お互いに「因」となり「果」となって、限りなく向上進展を遂げていく。人（技と心・精神）である。
- ・**職業**：生活を支える手段としての仕事。報酬が伴うか又は報酬を目的とするもの。
- ・**報酬**：仕事の報酬は能力であるとする世界があり、仕事

の報酬は仕事とであるとする世界もあり、  
 また、仕事の報酬は成長であるという世界もある。  
 ・**職業を選ぶ**：自分の生き方を選ぶことである。仕事を変えるということは生き方を変えるということである。  
 ・**職能人に求められる素養**：人間的素養、教養的素養、専門的素養の掛け算である。即ちどれ一つ欠けても職能人の素養としては不十分であり、これらのバランスの取れた素養を身につけることがだいじである。人間的素養とは、教養的素養や専門的素養の修練に取り組む強さや深さを左右し、それらの土台をなすものであり、創造的自立型人間の基盤をなすものとして幼少期から育まなければならない素養と言えよう。教養的素養とは、習得した知識や技術を何に用いたらよいかの方向を促す哲学であり、思想を形成するのに重要な役割を果たす。この素養の高い人ほど発想や着眼点に幅と奥行きがある。専門的素養では、最近の知識やハウツーより、原理等の基礎を使いこなせることが重要である。特に学校教育において、「なぜ」そうなのかという本質を考えることが大事である。

人間的素質	教養的素養	専門的素養
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 夢、希望、好奇心、着想力</li> <li>・ 観察力</li> <li>・ 「なぜ」という気持ち</li> <li>・ 論理的思考</li> <li>・ コミュニケーション能力</li> <li>・ 人間としての技能、知識、たしなみ（心得）</li> <li>・ 価値観</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 知識から養われた「心の豊かさ」（相手の立場を考慮できる思いやりの心、自分の接する万事への感謝の気持ち）</li> <li>・ 豊かなコミュニケーション、</li> <li>・ 冷静な判断力、柔軟な思考力</li> <li>・ 方向性を促す向上心</li> <li>・ 継続力、念持力、遂行力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 原理等の基礎を使いこなせること。</li> <li>・ 主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力、課題探求能力の育成があること</li> <li>・ 努力と誠実さ</li> </ul>

- ・**職能人(建築家等)の目指すもの**：「応心」の境地がしっかり手に入った人間を創ることです。
- ・**「応心技」**：「心は表現される」ものである。「心」の在り様で「技」は一変する。心構え、姿勢、態度、実行、反省の習慣化。
- ・**「得手応心」**：長い間の努力・経験の中から、パツと反応できるようになれ。例えば、ある人が何かの相談をしてきた場合、その人の状況や問題点に応じて、自分の持っている「知識や経験」を活かして適切なアドバイスをすることが求められる。仕事であれば、クライアントの「要望やニーズ」に合わせて、最適な提案やプランを立てられることが必要です。

め、目で見つめ、耳で聞き、肌でふれあい心で感じます。そして、言葉で考え欲求と感情を調整、自分の意思と情報を伝えます。心には求める心、感じる心、考えを語る心がある。自分とは身体が心を宿し、心が身体を動かしている存在です。私たちそれぞれが持つ独自の欲求・感情・言葉を正しく理解しよう。心の正しい理解が心を強くし正しい判断と行動を導きます。  
 ・**人間の言葉**：言語は人間に固有の本質であって単なる信号（音・光・図形等）ではなく、外的反応や行動から独立して内的に情報処理可能な音声による信号である。言語は感情を刺激し欲求を方向づけ、認知や思考の手段となって価値観や人生観を構成し、心と行動の枠組みをつくる。欲求と感情は心の無意識的な生理的基礎であり、言語は意識的な心の創造・拡大と調整機能を持つ。精神分析における意識の自我は言語的思考や意味づけによってはじめて成立する。言語は他の動物のような刺激

◆◆ その他 ◆◆

- ・**人間の心(心の三要素、欲求・感情・言葉)**：人は心で求

反応性にもとづく単なる音声信号ではなく主語・記述・目的語等による論理を記号化した音声信号である。それによって人類は情報処理の面で創造的構想力の飛躍的進歩を遂げた。

・**「型と形」**：具体的な手順をひとつひとつ全うすることによって、心に迫るのです。私はこれを「型に血を入れる」と申しております。「血」はその人の霊であり命です。下手でもいい、真剣に命がけで打ち込んでこそ、はじめて「型と血」が結びついて、「かたち（形）」が生まれるのです。

・**「哲学」が「構造」と「意匠」を貫き、自己と世界の設点を創出する**：

「哲学」は構造や意匠に「なぜそれが必要なのか（意味づけ）」を問う視座を与える。「構造」は哲学概念を支える「見えない骨格（機能性・力学的整合）」として機能する。「意匠」は哲学と機能が合意した語り（感性・形式）を可視化する。「哲学」が空間に命を吹き込み「構造」が時間に耐える骨格を与え「意匠」が感性と共鳴する表情を創り出す。「哲学」・「構造」・「意匠」の三位一体の設計に宿る。

・**「真・善・美・愛」の建築言語化**：

「真（構造）」：建築の構造や設計が誠実であること、理にかなったデザインと技術の融合。構造の誠実さと自然の一致。素材の真実性、構造の論理性、自然との調和。

「善（用）」：公共性や人間への配慮。災害から守る、安全性、社会への貢献。倫理的空間と人間への配慮。共生の設計、持続可能性、法と倫理の尊重。

「美（形）」：意匠や構成美、光の取り入れ方、素材の表情が空間に詩的な印象をもたらす。詩性と感性の構造化、詩的空間、比例とリズム、記憶の造形。

・**「愛」**：空間に宿る情と祈り、人への眼差し、記憶と倫理の継承、祈りの構造、設計者や居住者の想いが込められ人々の心を包む温盛があること。

・**建築物はあくまでも容れ物である**。「真・善・美・愛」を持った容れ物である。建築物は構造的に「真」であらなければならない。用にしたしては「善」であらなければならない。形は「美しく」なければならない。真・善・美の「調和」、「ハーモニ」、を常に意識していなければならない。用と美は六分、四分ってところかな。

・**語られぬ思想の詩**：

語れぬものが最も深く、最も遠くへと届く。風に任せて光に溶けて、沈黙の中に思想を残す。語ればこぼれる、語らずとも根づく、私は語らぬただ空間に詩を宿す、語らずとも空間が語る、沈黙が思想を運ぶ。

・**柿の実の詩(人生の詩)**：

熟れてこぼれる。語らずとも種は落ちる。風に任せて土に還る。誰かが拾い誰かが育てる。私はただ実りの余韻を残す。初冬の静けさに、種は語らぬまま風土の記憶となる。空間に詩を宿す。

・2021年10月、病気を「縁」として、「死」と向き合うことになった。**「死」と向き合うということは、私のこれまでの歩みと私に残された「生」と向き合うということでもある。**自分はどう生きようとしたのか、どう生きてきたのか。そして、最後にもう一度どう生きるのかを問われているのです。

・**「人間は何のために生きているのか」**これは答えることのできない質問のようだ。ある程度、答えることのできる質問は、「何のために生きているのか」ということではなくして、「どんな風に生きていったら一番幸せになるだろうか」という質問だけのように思われる。どんな風に一日を過ごしたらいいか、これが重大なのだ。

・**生命とは、「何をした」とき、その行為を通して、喜び、悲しみ、悩むことではないだろうか。**物自体を書くことは、それによってその物に何かを語らせよう、自分が語るのではなく、その物に語らせることである。